

秋田県衛生科学研究所報

第 48 号

平成 15 年度

ANNUAL REPORT

OF

THE AKITA PREFECTURAL INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH

No. 48

2004

秋田県衛生科学研究所

は じ め に

昨年の中頃はトリインフルエンザやSARS問題が世界の耳目を集めていたが、今、世界の最大の事件がスマトラ島沖の地震による大津波である。東南アジア諸国、インド、アフリカまでその被害は及び、総計500万人の被災者がいてそのうち十数万人が死亡した可能性があり、今後の感染症で死者はさらに倍以上に増えるであろうとのことである。日本人も、判明しただけで23人が亡くなっており、個人旅行での安否不明者が600人近いと言われる。現地の写真を見るとあちこちに生き物の死体による相当な腐敗臭があるらしく、皆マスクをしている。何しろ常夏の国でありこれから感染症の蔓延が心配される。地球がなにかおかしくなっていて、それに対する自然からのメッセージであるとか、おごり高ぶった人間への警告だとかいう論調でマスコミが騒ぎ立てるが、現実には医療・公衆衛生の現場で働く人間は、目の前で起きていることになんとか対処をしていかねばならない。

2か月前は中越の大地震とそれに続く水害で日本中が沸き立っていた。私も暮れにボランティアとして現地に行った。多くの被災者と会ったが、皆さんからは必死になって負けてたまるかという気持ちが伝わってきた。しかし壊れているとはいえまだ家に住める状況の人は元気であったが、家族、家や収入の道を失った人たちの気持ちを考えると暗たんたる気持ちになった。被災者の健康問題に限ると、阪神大震災では仮設住宅の高齢者の孤独死を防ぐのが重要だったが、中越では知り合い同士が固まって入居しており、あまり心配はなさそうである。しかし美しい棚田と棚池のある山暮らしの人々が、4畳半二間で玄関もない仮設住宅での暮らしは相当に堪えるはずである。心のケアは特に重要であろう。早くもとの生活を取り戻すことが一番の薬にちがいないが。

この二つの大事件（ひとつは現在進行形だが）で感じたことは、災害救急医療はなんとか体制が構築されてきたが、その後がまだまだであるということである。いずれも被災者やその家族の心のケアが大事であるが、マンパワーを含め、対応がなかなか難しい。犯罪被害者の遺族の心のケアも大事であると言われ、また、不登校の子供達に対するケア、そして、アスペルガーなどADHDや学習障害などが一般に理解されるようになって来た。一方では癌など慢性病患者に対する心のケアの必要性なども言われているが、すべてこれからである。

体の健康はもとより重要で、生活習慣病を改善することや感染症を防ぐことも大事であるが、最近のある免疫学者の説では、昔の日本人の食事をして、心を落ち着け、自律神経のバランスを取るような生活をするとかかなりの割合で病気を予防出来ると言うことであり、癌も治せるし、当然予防にもなり、慢性炎症も治るそうである。まさしく病は気からとも思わせる説である。この

説が世界の常識になれば医療や公衆衛生のかかなりの部分が解決してしまう。しかし難しいのはストレスからの解放であろう。これからはますます世界中で世の中が複雑化し、理想郷と言われる南の島でさえ自殺が増えてゆくという。日本では高齢化も加わってますます心の問題が大きく取りざたされるに違いない。地方衛生研究所がこの問題にどれだけ関われるかは疑問であるが、公衆衛生に携わるものとして常に心に留め置かねばいけないものであろう。

生活習慣病、新興・再興感染症、食の安全なども依然として立ち向かわねばいけない大きな問題であるがこの2か月間に起きた二つの事件から感じたことを述べてはじめての言葉とさせて頂く。

平成17年 1 月

秋田県衛生科学研究所長

鈴木 紀 行